

「冬芽のお話」

園長 川合 千尋

子どもたちに冬の桜の木の写真を見せたときのことです。「あっ、かかれている。」「もう生きていない。」という声が上がりました。その時に、「花や葉はないけれど、桜の木は生きているんだよ。枝の先をよく見ると冬芽（ふゆめ）というのがついているよ。」とお話をしました。それからしばらくすると、子どもたちから「園長先生、冬芽、見つけたよ！」という声をかけられました。みんな本当によくお話を聞いて、よく見ているなあと思い、うれしくなりました。

すっかりと葉を落とし、一見するともう枯れてしまったようにも見える木々でも、よく見てみると枝の先に小さな冬芽を付けているのが分かります。寒さの中では、植物は生育することが困難です。暖かい春が来るまで、葉や花になる芽をぎゅっと押し込んでじっと待っています。そんな冬芽が様々な木々に見て取れます。冬芽といっても、木々によって様々なものがあります。芽を鱗のような芽鱗（がりん）で包むものが多いようです。（サクラはこのタイプ 右）



その他にも、コブシやモクレンのようにふわふわとした毛でおおわれているものもあります。（左）また、トチノキはねばねばの粘液を出して、乾燥から身を守っています。どの木々も寒い冬を乗り切ろうと様々な工夫を凝らしています。



寒さに負けずに元気にがんばっている子どもたちを見ていると、冬芽と同じように、暖かい春に向けて、しっかりと自分の力を蓄えているように見えます。第三幼稚園の周辺にも、様々な植物が暖かい春を待っている様子をたくさん見ることができます。こんなふうに（右）何か動物のように見えるものもあります。お天気がよい日に探してみるとおもしろいですよ。

